刊行にあたって

文化的景観の制度が文化財保護法のなかに導入されたのが 2004 年、施行されたのが 2005 年である。2024 年・2025 年は文化的景観の 20 周年という節目の年であり、文化庁や重要文化的景観選定地では、20 周年を記念した行事がおこなわれている。決して意図したものではないが、結果的に本書も、そうした記念すべき年に刊行することとなった。20 周年を祝うものとしては、あまりにもささやかだが、1 つの節目を関係者の皆さまと一緒に喜ぶことにしたい。

20 周年とまではいかないが、京都府立大学文学部歴史学科と文化的景観との関係も相応の期間の積み上げがなされてきた。2008 年 4 月、文学部の改組に伴い歴史学科には 4 つのコースが設けられた。そのうちの文化遺産学コースのなかに、歴史地理学ゼミが新たに設けられることになった。その目論見の 1 つは、文化遺産・文化財のなかで新たな枠組みとなった「文化的景観」を学ぶことのできるゼミを設置することにあった。詳細な検討をしたわけではないが、おそらく、文化的景観を看板に掲げるゼミもしくは文化財系のコースの開設としては、全国でもっとも早かったのではないか（少なくともその 1 つ）と思われる。

こうした設置目的に合わせ、当初から「文化的景観研究」という授業が開講され、ゼミ生のみならず日本史や考古学といった他の文化財に関心を持つ学部生に対しても、文化的景観の調査・価値づけ・保存活用に関する情報に触れる機会を提供してきた。地域の文化財担当者を志す学部生にとって、新しい文化財の枠組みを知ることができるのは、一定のメリットがあったと思われる。また、この間、重要文化的景観の選定を目指すいくつかの地域で、ゼミとして調査に参加させていただいた。学生にとって、重要文化的景観の選定に結びつくような調査に携われた経験は、かけがえのないものとなっただろう。幸いなことに、こうした教育・研究の活動を経たゼミ生の何名かは、現在、文化財に関わる職に就き、各地で活躍してくれている。

さて、本書において注目したのは、文化的景観が地域の価値、すなわち「地域らしさ」を明確に価値づけるものであり、その価値を磨くことが地域づくりの 1 つとなる点である。「歴史や文化を活かした地域づくり」といった文言は、ほぼすべての市町村の総合計画に書かれているものといって過言ではないが、その内実は個別の文化財の保護といったものに留まっている自治体も多い。それは、各自治体（地域）が地域が紡いできた個性・価値をきちんと把握できていないからであり、何をどう活かしたらいいか分かっていないというのも一因であるように思われる。その点、文化的景観という考え方を敷衍することで、地域の価値を保全し活用していくことで、地域の個性を磨く地域づくりの方向性を見出せる可能性がある。

こうした点を意識しつつ、本書はすでに重要文化的景観に選定された地域が、どのように地域らしさを磨いていこうとしているのか、といった点を検討したものである。調査の一部については、2020 ～ 2023 年度科学研究費基盤研究（C）「文化的景観の価値を活かした地域づくりに向けた基礎研究」（0K01160）を利用した。本研究の成果は別の媒体でも報告しており（もしくは報告予定）、本書は科研費の調査研究のうち、愛媛県西予市ならびに沖縄県今帰仁村の事例に即した調査報告の部分にあたる。また、巻末には、歴史地理学ゼミでの調査を基本としつつ他の資料も用いて重要文化的景観選定地の基本情報をまとめ、掲載することにした。

調査にあたっては、調査地の皆さまに多大なるご協力を賜った。改めて、感謝申し上げたい。文化的景観を活かすとはどういうことなのかについて、現場の的確な声を聴くことができたことは、調査研究の推進にとって大変貴重であった。文化的景観を活かした地域づくりが、次の 10 年・20 年とどのように展開していくのか、地域の皆さまと一緒に、今後も引き続き検討していきたい。

2024 年 9 月

京都府立大学文学部歴史学科（歴史地理学ゼミ）